

片瀬先生のことども

第十九回生（昭和十二年卒） 岩本 洋

戸山小学校の頃を偲ぶということになると、我々には二年二学期から五年まで担任して頂いた片瀬先生を語らずには通れない。それ程絆のつよい師と子らであった。先生は東京帝大文学部を卒業されて初めての勤務先が戸山小学校であり、そして初めて受け持ったのが我々二年三組であった。それだけに先生も新しい人生の出発に当たって教育へかける情熱の迸るのを禁じ得なかったのである。教壇に迎えた先生はまだ学生服のまゝだった。それが我々子どもにとって奇異にもうつったが、反面又新鮮なお兄さんという感じもつよくなり、とても親近感を覚えたものであった。

先生はとに角熱心だった。出来ない子があれば、その子らが分かるまで次に進もうとはしない。それでいて「立ってなさい」などと一度も言われたことはなかったし、体罰などは全くされたりはしない。

いや一度だけ我々悪ガキ十四、五人が放課後教壇の前に並ばされビンタを頂戴したことがあった。そのいきさつはこうだった。

四年の秋のこと、Hという一寸小なまいきな子がいて、その子が三組のチョット可

愛い子と遊んでいるのをみつけて誰かが「あいつN子と遊んでやがった。生意気だ」という。というのもN子は我々のクラスで皆目をつけていた子だったのだ。それで悪ガキども、焼きもちを焼いて（そうはいわないが）「生意気だ、ひっぱたいてしまえ」ということになり、その日放課後Hを戸山ヶ原の三角山によび出して殴ってしまった。生憎Hは今でいう母子家庭で、早速子どもの泣き乍らの訴えで母親が片瀬先生の所にうなりこんできたのである。翌日授業はふだん通りに行われた。そして五時間目が終わって帰り支度をという時に、先生が今迄にない厳しい表情になって「昨日Hを三角山で殴ったものはここに残れ。他のものは帰って宜しい」途端に「しまった。バレたか」と思ったが既に後の祭り。そして教壇の前に並ばされ、憤りと愛する子供らの行為への悲しみをこめて激しい口調でお叱言が始まった。唇をふるわせ、口から泡をふき本当に凄かった。所が三分程したころだろうか、どうも先生の口調がおかしい。垂れていた頭を一寸あげて上目使いに先生をみてみると、涙を流し始められているのだ。何か我々もそれをみて一人二人と泣きじゃくり出した。最後に「先生は教え子を殴ったりしないと先生になるとき誓った。併しHがみた痛い思いをお前等もしなきゃいけ

ない。先生は之から二発づつお前等を殴る。自分が嫌だと思ふことは他人に絶対してはいけないぞ」そして先生から平手打ちの二発を皆頂戴した。先生も我々悪ガキも涙をポロポロ流していた。あのときの先生の平手打ちは何だか痛くなかったみたいである。何故ならあの先生が我々に只一度の体罰をされたのだから、痛かったら五十年たってもそれを忘れることがないだろうからである。

先生は愛の深いお人だった。だから成績が良くとも悪くとも差別せず、病欠の子が二三日続くと必ず放課後見舞にゆかれた。そして今集まると皆がいう。「先生は見舞に見えても決して茶一杯もあがらずに帰られた」と。今の御時世の先生とPTAや父母らとのおつき合いの話をきく度に、やはり素晴らしき先生だったと一入ひとしほの思いがつのる。

併し先生は運動神経は御世辞にもある方ではなかった。いやむしろ鈍なお人というべきであろう。運動会で先生対抗の大王ころがしなどは「頑張れ、……」と声援している我々がガツクリするのだ。玉を先生はまっすぐ転がせず、すぐ縄をはった応援席の方へ来てしまう。そして次の授業の日「ニコニコ笑いながら「相手に勝たしてあげたのさ」と云われる。皆大笑い。「先生

いつもダメだナー」なんていうのもいる。又爆笑。

先生は四年を担任して下さっているときに結婚された。洋画壇の一匹狼として活躍されていた早田楽斉という方の娘さんで可愛い方だった。そして五年も三学期を迎えたとき、先生がこの四月から静岡師範学校へ栄転されるということが伝わった。生徒から親へ伝わり、親は何とか六年卒業までズツとみて頂きたいと寄り寄り相談したらしい。併し結局先生の栄転をお邪魔してはいけないということで、クラスでお金を出し合って記念品を贈ろうということになった。十六円が集まり、伊勢丹へ置時計を私と他四人の諸君が買いに行った。

愈^よ昭和十一年三月、先生が静岡へ赴任される日、東京駅へ我々クラスの子や親、同僚の先生方がホームに集まった。I君が機関車をひっぱたき乍ら「この野郎」と怒り泣きしてたのを今でも忘れない。

先生は長野県の二葉高校の校長等を歴任された後、定年前に病弱であったが為に退任され、昭和四十二年秋、東京世田谷の自宅で亡くなった。六十才であった。我々悪ガキの多くが通夜、告別式に参列した。之には後日譚がある。

生前も折にふれ片瀬先生を囲んで片瀬会と称して集まっていたが、亡くなってから

年一回この片瀬会を開こうという事になり、数年前までは二月の第一土曜の夕方ということで、先生の未亡人をお招きして歓談の一ときを過ごしてきたが、未亡人も年をとってみえたし、我々も若くはないということ、四年前から三月の第一土曜と一月ズラして未亡人にも御出席願って楽しくやっている。十五人位は集っていたが、こゝ数年でO君S君S君等鬼籍に入る人も出て来て今年の片瀬会は十人丁度だった。

戸山ヶ原の朝風に：校歌の出だしの部分を思い出し乍ら、来年は小学校入学六十周年だなんて考えて、泌^{しみ}々長くも来つるものかなと思うとともに、よき師、よき友への感謝の心と故旧忘れうべきの思いがつの。
(平成二年・とやま第十二集)



片瀬先生（昭和十一年 懐かしの写真帖より）